

科学と社会委員会 メディア懇談分科会（第24期・第1回）

議事要旨

日時：3月22日（木）14：00－16：00

場所：5階5-D会議室

出席者：山極委員、渡辺委員、三成委員、赤阪委員、土生委員

◆議題（1）役員の選出について

互選により渡辺委員が委員長に決定した。また渡辺委員長の指名より土生委員が副委員長に決定した。

◆議題（2）日本学術会議とメディアとの関係について

①分科会の設置目的・現状の科学に関する情報発信の問題意識について渡辺委員長・山極委員より説明があり、意見交換が行われた。

- メディアと学術会議の間の信頼関係を作りたい。学術会議からメディアへ発信しても理解していただくのが難しいという現状があり、また学術会議の発信したいことが、必ずしも社会に役立つものとなっていない。
- メディアの専門家の方から、学術会議の発信の問題点について意見を頂き、改善策について議論していきたい。
- 学術会議の社会での認知度が低いことが我々の考える大きな課題の一つであるが、もう一つは、メディアの特に学術・科学面での力が弱っているのではないか。（科学雑誌の減少、科学の専門的知識を持っている記者の減少）
- 日本の社会の中で科学の普及度は諸外国に比べて非常に落ちている。学者も論文を出すことに熱中してしまい、社会（小・中学生も含めて）にきちんと理解できるような形で発信していないし、メディアも一般市民に分かりやすい記事を書く余裕がない。コミュニケーションの問題、メディアの方のリテラシーの問題、政治の問題、制度改革に関わってくる問題でもあると思うが、そういうことを少し広く討論をして、どういう改革が必要なのか、どの側にどういうことを訴えていけば、今のこの閉塞感を脱することが

できるのか。いくつか論点を出して、それをきちんと受け止めていただけたところに出せればいいと思う。

- メディアで出された公論というものが、中高の教育にとって非常に重要なものとなる。きちんとした日本語作文能力、日本語理解能力、そして世界をどうとらえるかという視野。そこを我々学者もメディアも協力しながらきちんとしたものを出していかなければならない。そこを間違えると大変なことになるという危機感を感じている。
- 新聞もテレビでは世の中の動きを一日単位や週単位で素早くとらえることが重要視されている。長期間にわたり徐々に変化していく事態をとらえるには向かない。科学についてもエポックメイキングな大発見があれば、ニュースとして大きく取り上げられるが、漸進的に進み研究や技術については、それをうまく捉える術がない。
- 科学関連の報道自体は、近年、各社とも科学部が独立させており、科学を扱う記者の絶対数は増えているように思う。特に東日本大震災以降は、原子力や地震学などの科学的専門知識が強く求められるようになり、専門記者は育っている。
- ただ、全体としては、記者の9割近くが文系出身であり、理系出身の記者は圧倒的に少数派だ。このため科学技術の専門的な知識に乏しく、会見で貧弱な質問しかできないこともある。特にマスコミ幹部のほとんどは文科系で理科系に苦手意識を持っている人が多い。

(国際発信について)

- 日本は海外からの情報の輸入については力をいれるが、日本からの情報発信についてはあまり力を入れていない。海外記者のサイエンスへの関心は相対的に低い印象を持っているが、モノによってはジャーナリストの関心と呼ぶことができる。
- 現場にメディアの関係者を連れていき、現場を見てもらうことが重要。そうするとかなりの関心と呼ぶことができるし記事も出てくる。海外メディアに取り上げてもらうのは、こちらからの働きかけ如何にかかっている。働きかけのあるなしで結果は全然違ってくるだろう。
- 日本学術会議は国際発信が弱い。23期は71本の提言を出した。そのうちの1/3程度しか英訳ができていない。SDGsについては日本学術会議で審議し、国連に対して

解決策を提言しようと考えている。それはもちろん英語でないとできない。国際的な日本学術会議の発信の仕方というのもこれから重要になってくる。

- 日本は海外のことを調査し、かなり勉強するのだが、日本の視点を日本の側から打ち出すことはあまりしない。ただむしろ世界は日本からの発信であるとか、混沌としたアジアの中で日本はどう考えているのかは興味があるとの話は聞く。発信できるものがありながら発信していないのは非常にもったいないこと。
- 人文社会科学系の国際発信力は非常に弱い。英語を出すという動機づけが弱い中で、どのように国際発信していけばいいのか。これは日本発の面白い発想だと思えるような話を、どのように外国人記者に売り込んだらいいのか。
- 人文社会科学の重要な業績について、何らかの大型の資金を取って、公的に翻訳して発信していく。日本では基本的には科学者の個人任せにしているので、何らかの公的な基準で、すぐれたものに資金をきちんとつけて出していくという取組が必要だという提言を学術会議が数年前に出したことがある。今期はそれを引き継いで検討をどこまでできるかやってみようと思っている。
- インターネット配信で情報を提供する、あるいはニュースを流す、学術情報を流すということは有効である。日本の講義やシンポジウムも YouTube で流してみてもどうか。
(海外発信を目的とする場合は英語の字幕付きで)
- 個々の研究者は自分の研究者ネットワークを使って、学会や国際会議で自分の研究を発表すれば済むので、わざわざ発信する必要はないと考えている、このような閉じたネットワークを改善しないと日本の学術は国際的にはならない。ある分野では非常に国際的であるが、日本の大学でも研究者でも海外の産業界とはうまく連携できていない。そういうことを日本学術会議が役割として担えないだろうか。
- 海外の研究者なり学術団体というのはどのように発信しようとしているのか、海外から日本の学術の今の状況についての問いかけはないので、日本側から出ていかないとダメなのだが、我々の方から発信するにはどうすればいいのか。どういうメディアに頼ればいいのか。
- 欧米の大学などは有名教授、スター教授を育てることに取り組んでいるようだ。日本ではあまりやらないようだが。そこの大学のスター教授に外国人記者とインタビューを

やってもらおう。そうすれば世界に発信されていく。そういうことをもっと積極的にやっていくといいと思う。

- 今は大学単位でやっているわけだけれど、日本学術会議でもできるだろうか。
- かつてJST主催で、福島在住の高校生と科学者で議論をさせたことがあるが、海外メディアも非常に注目してくれた。福島に住んでいる高校生が何を感じ、科学とどのように関係しているのかはとても関心を持たれたようだった。現場などを入れて、日本が今をどのように考えているかを、科学の観点から海外に発信するのが必要。
- 有名教授、スター教授にスポットを当てる観点から、その日本版を、全日本チームというものを日本学術会議でやればいいのか。
- 先ほどのシンポジウムにそのようなスター科学者を入れて、さらにジャーナリストを入れれば何らかの形でプレスにも取り上げられると思う。

(記者会見・記者懇談会について)

- これから定例の記者会見をやろうかと思っているが、記者の興味は、極めて特定のトピックのみ。即時的な記事だけではなくて、ストーリー性を持った、もっと日本社会にとって、あるいは世界にとって重要な意味があるようなテーマをイシューとして取り上げてもらうようなことはできないか。
- プレスの機関では” deep background briefing” といって、何か問題となっている案件について、各省の局長クラスの人等をお呼びして、外国人記者にブリーフィングを行うこととしているが、その方のお名前は出さないことを特徴としている。そういったアレンジは可能。
- 学術会議で各分野で記者を呼んでその時に代表的なイシュー、トピックスというのを語ってもらい、それを記者の人たちに判断してもらい、記事にしてもらえたらもっと詳しくブリーフィングするというような機会を設けるといいかもしれない。
- ニュース性がないと記事にならないと言うが、もう少し長期的なトレンドだとか、社会の方向性の話であるとか、そういったものこそ国民は求めているのではないか。
- 記者と一口にいても、日々のナマニュースを追いかけている若手、中堅の現場記者もいれば、俯瞰した視点から解説的な記事を書く論説委員や解説委員もいる。軍事研究

に関する発信は現場記者に、長期的トレンドに関するものは論説・解説系記者に、というように発信するニュースの内容に応じて、ターゲットの力点を変えてみる必要がある。そのためには、各社の記者とのネットワークづくりが必要になってくる。接触した記者の名刺を集め、メールアドレスや担当分野別のリストを作る地道な作業も有効かもしれない。

(テレビ・動画配信等の活用について)

- テレビ番組（NHK等）で講演・講義の様子などを紹介してはどうか。
- 科学者プラスアルファがないと一般の人から見るとつまらないとを感じるかもしれない。
- どこかの新聞社で話を引き出すのがうまいインタビュアーを用意してもらえたらいくらでも提供できる材料はあるが。
- 科学者側からだけの一方的な論理だけではない発信というのができると違うかもしれない。受け手代表の立場でインタビューしてもらって、「先生そこのところよくわかりません」といったような掛け合いがあれば面白い。
- その模様を YouTube で公開したり、SNSで発信すればかなりの注目を集めることができると思う。
- フォローアップするような記事も出てくるかもしれない。ディスカッションに先駆けてある話題を作ることが必要。新聞に載れば週刊誌や月刊誌も追随するかもしれない。
- そういう企画をこの委員会なりできちんとやらないと、今のシンポジウムはそれぞれ主催の分科会・委員会主体でやっている。特に課題別委員会などはこういった取組にいいかもしれない。
- 問題はファシリテーター。若手アカデミーを利用していてもいいかもしれない。
- 面白そうなものがあれば自分たちも場所を提供する。科学を通して世の中がどのように変わっていくかは皆知りたいと思っており、需要はあるはず。
- 昨年メディアで日本学術会議が取り上げられたのは、軍事的安全保障の話と福島放射線の影響、ヒトゲノム。どうも難しそうであんまり前向きな話ではないような印象を与える。2020年の東京オリンピックとサイエンス、何か大きなイベントに合わせて、世

界の目が注がれているのだから、学術会議のやっておられる研究だとかを発信したらいいのではないか。

(学術会議のプレス等への発信の仕方について)

- 会員・連携会員は提言を難しくとらえすぎていないか。もっとフランクなわかりやすい文章で発信する必要があるだろう。提言とは違う名前を設けて、発出というのを考えた方がいいかもしれない。例えば「意見」のようなもの。
- 受け手のことを意識したような発信が必要。
- 共同主催の国際会議やシンポジウム等、日本学術会議に関連したシンポジウムでも、そこに来られた出席者と日本の科学者が対談を行うとか、あるいはその会議で取り上げられたトピックについて、より分かりやすい形のレクチャーを英語でするとか、また海外から来た記者にも解説を行うようにすれば、二重三重にメッセージを届けることができるのではないか。
- 公開シンポジウムに記者の人を入れて議論するのも一案。
- 新聞記者が記事にする場合はプレスリリースの記載をそのまま利用することが多い。そんな記者の行動からもプレスリリースを出す場合はタイトルが大事。

(子ども・若い世代への発信について)

- 例えば偉い大学の物理の先生が、どこかの小学校や中学校に出前講義をするといううのは記事にしやすい。
- メルマガ、フェイスブックなどのSNSを使って、若い人たちに向けた発信を行うのがいいかもしれない。
- 広報委員会でも日本学術会議はSNSをもっと活用すべきという声が上がっている。SNSについてもどうにかしたい。

(学術の動向)

- 「学術の動向」という雑誌で日本学術会議の動きを毎月捉えて発信している。非常にまとまったいい論文が掲載されているのだが、固く見えてしまって、一般の人とはともか

く、政府関係者の人も読んでいないようだ。これを何とかしなければならない。

○ 学術の動向も 30 代から 40 代くらいの若手を取り上げてはどうか。

(若手アカデミー)

○ 24 期は 45 歳未満の若手のアカデミーを大幅に増やしている。これから世界を背負っていこうという人たちなので、そういう人たちを中心に何かやればいいのかもかもしれない。

◆議題（3）その他

【今後の予定について】

○本日の論点整理をして、これから日本学術会議がどのようなことをやっていくべきか、具体案を出してまたご意見をいただきたいと思います。

○次回の開催日程は追って調整させて頂く。

(以 上)